森村誠一

殺人花壇

サンケイ

殺人花壇

森村誠一

発行者　小野田政
編集者　塩田廣八
印刷　凸版印刷株式会社
製本　株式会社宮本製本所
発行所　株式会社サンケイ出版
東京・千代田区神田錦町三の一五梅屋ビル(101)
大阪・北区梅田町二七(530)
乱丁・落丁本はおとりかえします

©森村誠一　1972　Printed in Japan　0093－077709－2756
〈検印省略〉

目次

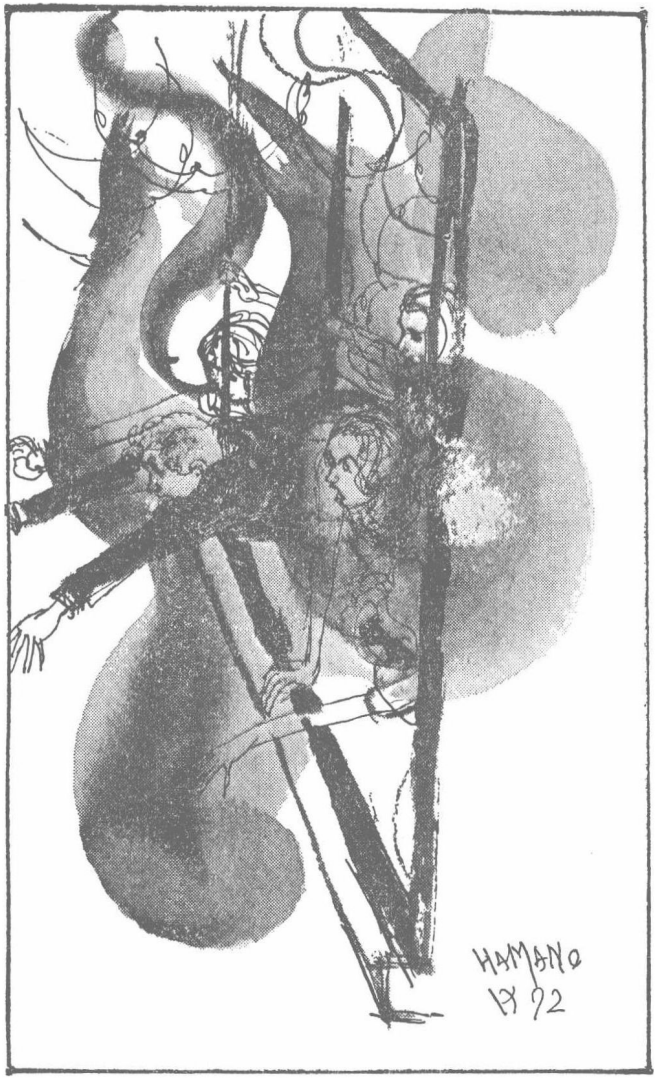
殺人花壇　5
殺意の重奏　51
虫の息　97
虚構の家族　131
あるエリート部長の蒸発　173
接伴(せっぱん)社員〝まき〟の復讐　201
小説代理業(ノベル・エージェント)　233

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

殺人花壇

挿画・濱野彰親

殺人花壇



1

初めて利用するホテルだったが、すぐにわかった。限られた土地を最も効率よく利用するために設計されたものとみえて、やけに細長いノッポの建物である。

一、二階は貸店舗になっていて、三階以上がホテルである。フロントは三階にある。エレベーターはいくら呼んでも、三階に停まったまま下りて来ないので、止むを得ず階段を昇った。

ちょうど腕時計は午前一時を指していた。

「睦子のやつ、いまごろはさぞや待ちくたびれていることだろう」

早瀬君男は、これからはじまる女との、密室の中の悦楽をおもってほくそ笑んだ。睦子と約束した時間は、十一時である。ところが今日にかぎって、明日までに仕上げておかなければならない原稿があって、二時間も遅れてしまった。

人妻とのデートにしては、ずいぶん中途半端な時間であるが、睦子の夫の職業の性格上、止むを得ない。それに早瀬にしても、普通のサラリーマンのように定時に退けない仕事をもっているので、このほうが都合がよかった。

今夜は睦子の夫は夜勤である。仕事に出ている間は、まちがっても妻に電話をかけてくるようなことはない。

明日の朝まで、安心して、あの豊満な肉体を飽食できるかとおもうと、早瀬は気もそぞろで、仕事が手につかなかったが、こんなときにかぎって意地悪く教授からある雑誌に発表する原稿の推敲を頼まれてしまった。

これはすでに学界で通説となっている学説を痛烈に批判し、まったく新しい解釈を加えたもので、これが発表されると、学界にかなりの波乱を巻き起こすはずであった。

発表誌も権威あるものである。教授がもう一度最後に目を通すことになるが、これほど重要な原稿の推敲を任せるということは、いかに教授が、早瀬を信頼しているかを物語るものである。

教授はそれを頼むときはっきりと、

「他の者には任せられない」

と言った。

それほどに目をかけてくれているのに、今夜は女とのデートだからと言って、断われるものではない。それどころか、女がいるということは絶対に教授には伏せなければならない事情があった。

もし教授の信任を裏切り、そのヒキを失ったら、早瀬の現在と将来はないと言ってもよかった。

だから睦子とデートの約束をしたあとに、教授から仕事を命じられても、迷惑げな態度のかけらも覗かせてはならなかった。

さりとて女との久しぶりのデートも取り消したくない。相手は人妻である。今夜のチャンスを失えば、またいつあの美味な肉体にありつけるかわからない。

こうして早瀬の二兎を狙った獅子奮迅の働きのおかげで、ようやくいま女の待つホテルへ駆けつけて来たというわけであった。

彼らがこのホテルを利用するのは、初めてである。いつもは郊外のモーテルや温泉マークで忍び逢っていた。

「どうしていつものホテルを使わないの？」
と、睦子から連絡を受けたとき、早瀬が聞くと、
「来ればわかるわ。大きなメリットがあるのよ、ウフフ」
と含み笑いをした。しかし外観にしても、中へ入っても、べつに変わった趣向がありそうにも見えない。ターミナルの駅の近くで、足の便はいいが、何の風趣もない実用性一点張りのビジネスホテルのようである。
階段を昇って行くと、午前一時だから当然のことでもあるが、灯の消えた無人の店舗や事務所が、いっそう荒涼とした雰囲気を濃ませている。女と忍び逢うようなムードはどこにもない。
「きっと部屋の中におもしろい仕掛けがあるのだろう」
早瀬は、期待を室内につないだ。それに睦子の、男に抱かれるために造られたような、あの量感と屈曲の豊かな肉体さえあれば、部屋の仕掛けやムードなどはどうでもよかった。
ようやく階段を昇り終わって、フロント前のロビーへ出た。エレベーターはその階で停止していた。ロビーの奥にフロントのカウンターがあり、ワイシャツ姿の男がポータブルの金庫の前で、その日の売上げを計算していた。
早瀬が入って行くと、そんな時間に客が来るとはおもっていなかったらしく、男はギョッとしたように顔を上げた。二十四、五歳の男である。売上げを数えている最中に早瀬が突然入って来たので、警戒したのであろう。
強盗などとまちがわれては困るので、早瀬は少し慌てた口調で、
「連れの者が先に着いているはずなんだが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

と言った。フロントの男は、それを聞いてようやく安心したような表情になって、
「奥様ですか。失礼ですが、お名前は？」
と尋ねた。彼の表情は客を迎えるホテルマンのものに戻っている。早瀬が睦子とのデートのときに使う偽名を告げると、男は、客のリストのようなものを見て、
「615号です。六階の15号室ですから、エレベーターでどうぞ」と言った。
「エレベーターって言ったって、ここで停まったまま動かないじゃないか」
「すみません。〝停止〟をかけてしまいましたので。もうお客様がいらっしゃるとはおもわなかったものですから」
男は慌てて、搬機（ケージ）の中へ駆け込み、操作盤の中の停止というボタンを外した。このボタンを押すと、どこの階で呼んでもケージは動かなくなる。
フロントの男は、早瀬をケージに乗せると、⑥のボタンを押して、自分だけ下りた。
615号室は、ごく普通のダブルだった。寝るために必要な最小限度の設備があるだけで、味も素気もない部屋である。
「遅かったわあ、もう来てくれないのかとおもった」
待ちくたびれていた睦子は、ドアを開くと同時に、熱く厚ぼったい肉の塊を、どさっと彼の腕の中へ投げ込んで来た。
それからどのくらいたったろうか、獣のような男女の貪り合いに飽食して、体をからめ合ったまま寝入ってしまった彼らは、突然、「火事だ！」という悲鳴に眠りを破られた。
寝起きの朦朧（もうろう）とした視野に空調（エアコン）の換気口からモクモクと吹き出して来る煙が映った。同時に異

臭が鼻を突いた。
彼らは本能的に危険を意識した。ここは細長いビルの六階である。煙に包まれたら逃げ場がない。
「逃げるんだ！」
早瀬は睦子の肩をつかんだ。
「坊やが」
睦子が蒼白になって硬直した。
「子供がどうしたんだ？」
「預けてあるのよ。このホテルは子供連れの客のために、託児サービスをやってるの」
なるほど彼女がメリットがあると言ったのは、その意味であった。コブ付きの人妻に、心おきなく情事を愉しんでもらうために、子供を預かっているのである。
しかし感心している暇はなかった。
「子供はどこにいるんだ」
「確かもっと上の方よ!?」
「上の方だって」
「私、行くわ」
睦子は、すでに半狂乱になっていた。裸同然の姿であるが、それを気にしている余裕もない。
ドアを開けると、いちだんと濃密な黒煙が吹きつけて来た。宿泊客のものらしい悲鳴と脱出路を求めて逃げまどう音が、煙といっしょに殺到した。

早瀬は、もはや子供を救うのは無理だと悟った。ぐずぐずしていればこちらの生命が危ないところである。

「逃げるんだ。死ぬぞ！」

早瀬は咄嗟の知恵でタオルで鼻と口を被うと、睦子の腕をつかんで、廊下を非常口の方へ走った。さいわいなことにまだ電気は消えていない。

彼は、有毒ガスのことを考えていた。新建材や化学繊維から発生する有毒ガスは一息吸い込んだだけで行動の自由を奪われると言われる。

行動力がまだあるということは、その恐るべきガスに捕捉されていないということである。動けるうちに、逃げ路を見つけなければならなかった。

火元は下の階らしい。下方から吹き上って来る煙は、廊下を水平に流れて、みるみる濃度を濃くしてくる。視界が速やかに悪くなった。

ようやく非常口を見出して、ドアを開けると、刺戟的な異臭をもった黒煙が噴煙のように、顔に吹きつけた。非常階段とは名ばかりで、建物内部に組み込まれているために、煙を吸い上げる煙突となっていた。

「だめだ！　階段からは逃げられない」

彼は咄嗟の判断で廊下を引き返すと、表通りに面した部屋の一つへ飛び込んだ。その部屋の客はすでに逃げ出したとみえて、姿はない。

彼は窓際によって、下からの救援を待つつもりだった。窓を開けると、すでに下には黒山のような群衆が集まっている。消防車も何台か見える。

電気照明が消えた。ドアを閉めても、換気口から吹き入る煙を防ぐことはできない。窓から首を突き出しても、吹き出す煙に捉われてしまう。

「救けてくれ！」

早瀬は、下方へ向けて必死に救いを求めた。

「坊やを救けなければ」

ここまで早瀬に引きずられて来た睦子が、廊下の方へ引き返そうとした。

「馬鹿！　死ぬぞ」

早瀬は驚いて、腕をつかんだ。

「坊やを放ってはおけないわ」

睦子は、女とはおもえないような力で、早瀬の手をふりほどいた。それはすでに彼のよく知っている睦子ではない。彼と体を結び合って、共通の快楽を分けてのたうちまわった女ではなく、子供の安否を気遣う母親になり切っていた。

彼女にはすでに迫り来る炎も煙も目に入らない様子である。危険も意識していないようだ。

彼はそこに鬼を見たとおもった。子供を想う〝母鬼〟であった。

「あっ止せ！」

早瀬が引き止めるよりも早く、彼女は、煙の奥へ飛び込んでしまった。一瞬、後を追おうとした彼は、睦子がドアを開けたことによって津波のように殺到して来た黒煙に押し戻された。

鬼と、単に女と一夜の享楽を分かち合った男との差が、そこにあった。

2

早瀬は、危ういところを、ようやくさしのべられたシュノーケル車のはしごによって救出された。救われたときは、煙に包まれて窒息寸前だったが、動きまわらずにじっと窓際で救いを待っていたのがよかった。

救援を待ち切れずに動きまわった者や、窓から飛び下りた者は、例外なくたすからなかった。直ちにもよりの救急病院にかつぎ込まれたが、奇跡的にかすり傷一つ負っていない。煙を吹きつけられて目と喉が少し痛んだが、それも大したことはない。悪いガスも吸わなかったようである。

平静になってくるにつれて、子供を捜して煙の奥へ飛び込んで行った睦子のことが心配になってきた。

「恐らくたすからなかったろう」

と早瀬はおもった。

「可哀想に、親子二人とも死んでしまったか」

とおもうと、彼の胸は痛んだ。睦子と関係をもつようになってから、いつも最大の障害になったのは、彼女に子供がいたことであった。

彼らの関係は、たがいに欲望を処理するだけの割り切ったものである。

「どちらにも迷惑をかけない。どちらかがいやになったら、その場で解消する。おたがいにもっていない〝道具〟の貸しっこをするだけよ」

ということではじまった仲が、もう二年もつづいているのは、二人がこのルールを忠実に守ったからである。

睦子の夫は新聞記者である。仕事の関係で留守がちのことが多い。夫に放り出されて女盛りの熟れ切った肉体をもてあましていたところ、東都大学の生化学教室の講師をしていた早瀬と知り合った。

早瀬も薄給の独身講師で、女に餓えていた。ここに需要と供給が一致したのである。熟れた肉体に貯留した欲求不満を若い男によっておもうさま鎮められたいと願うと同時に、夫との家庭も失いたくない睦子にとっては、秘密を守ってくれる男ということが絶対の条件だった。

その点、将来その大学で教授の椅子を狙っており、神妙に身を律していなければならない早瀬は、睦子にとってまさに理想的な存在であった。

彼らの関係がはじまる一年ほど前に、睦子は子供を生んでいた。子供が小さいうちは、情事の褥のかたわらへ寝かせておくことができた。それすら、ムードが最高に高まったところで泣きだされて、興醒めになったことが多い。

子供が三歳にもなると、寝かしつけておくわけにはいかない。デートをする前に、子供の預け先を見つけなければならなかった。夫の留守と託児先と早瀬の都合という三つの条件が一致しなければならないので、どうしても逢う回数が間遠になる。

そこへ託児所つきのホテルが現われたから睦子が飛びついたのも無理はなかった。そして、初めて利用した夜に、火事に遭遇したのである。

「救け出された人は、みなこの病院へ運び込まれたのですか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c